

崔書勉先生と私 『崔書勉先生との縁』

公益財団法人 日韓文化交流基金 業務執行理事 阿部 孝哉

崔書勉先生に最初にお会いしたのは、一九七三年頃、当時飯倉にあった韓国研究院に私の駐韓大使館在勤時の上司である故金山政英大使をお訪ねした時だったと記憶している。駐韓大使のポストを最後に退官され、崔先生と親交を深めることになった金山大使は、韓国研究院の一室に机を構えておられた。その後、同じカトリック信者として、金山大使は崔先生と深い絆で結ばれることになった。金山大使の墓所がソウル近郊の一山市のカトリック墓地にあるが、同墓地は崔先生のご両親とご自身の墓所であるが、その敷地に崔先生が日韓の有志から献金を募って盟友金山政英の墓を建てたものである。同墓所には、崔先生と何回か訪問したが、二〇〇〇年の夏には日韓談話室の方々とも一緒した。

崔先生とは、ソウル、釜山、瀋陽といった私の外交官としての任地で度々お会いする機会を得たが、二〇〇〇年代初頭のソウル在勤時は、東京在住であった崔先生が来られると、宿舎のホテルに呼ばれ、今は亡き作家韓雲史先生と三人で花札をするというのが決まったパターンであった。人生の大先輩である両先生と花札をしながら雑談に興じるのは、なかなか得難い耳学問の機会でもあり、忘れがたい思い出であるが、授業料と思つて真剣でなかったせいなのか、花札は何時も負けていたという記憶がある。

私の瀋陽在勤時には、来訪された崔先生を同僚の韓国総領事と共に瀋陽郊外の撫順市までお連れして満州料理をご一緒したのも懐かしい思い出であるが、崔先生は満州料理についても該博な知識をもつておられ、その含蓄のあるお話に感じ入ったものである。崔先生の知識の豊かさや記憶力の良さは、夙に衆人の知るところであり、凡夫の羨むところでもあるが、私が崔先生を師父として仰ぐ訳は、何よりも他人に対して分け隔てなく接するその態度にある。韓国人は日本人に比べ、打ち解けた態度で他人に接する性格を持っているとはいへ、私を含め若輩者に対しても誠心で

接してくれる崔先生のような人物には、未だかつてお目にかかったことはない。

私が座右の銘としている崔先生の言葉があるが、日韓関係を考察する時には、日本や韓国の立ち位置よりも一段高い場所から見渡してみる姿勢が必要であるという忠言である。折に触れその言葉を反芻している。崔先生と縁をもてたことに感謝。頓首